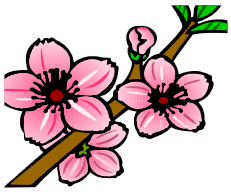
啐啄 そったく

平成２８年　４月　12日
http://www.osakasayama.ed.jp
gakkou@city.osakasayama.osaka.jp

大阪狭山市教育委員会学校教育グループ　１１４号

啐啄とは「内から殻をたたく雛、外から殻をつつく親鳥」　呼吸がぴったり合わさって命が誕生していくさまを表しています。
今年度も呼吸を合わせて子どもたちを育ててまいりましょう。　どうぞよろしくお願いします。

新しい年度のスタートです 気持ちを揃えて挑みましょう！



“問い”を持つ人は懸命に考えます。意欲を持って学びます。みんなで“問い”を抱ける学校園は、取組みに対する熱が絶えません。

大阪狭山市では、今年度も子どもたちが「どう育っているか。何を必要としているか。どんな力を付けていくのか」をしっかり見極めて『平成２８年度大阪狭山市保育教育指針』を掲げています。そして、この実現に向けて絶えず“問い”を持ち続け１年間の取組みを進めてまいります。

平成２８年度 **大阪狭山市保育教育指針**

さやまっ子の夢をふくらませる教育

【めざす子ども像】・自分らしくいきいきと学び、さやまを愛する子

―― 人とつながり、たくましく生き抜く人づくりをめざして ――

取組みの重点 ① 学校力の向上

- **○教職員のチームワークによる、どの子も大切にする保育や教育の提供**
- **○家庭や地域との連携による、アイディアに満ちた学校園づくり**
- **○調査の結果分析に基づく取組みの工夫改善**

学校力を「ポジティブな対応能力だ」と考える人。「子どもを育てていく組織の力」と考える人・・・

各学校園はそれぞれの教育目標達成に向け、このような力を高めていく必要があります。

この学校力を担うのは、学校園の中の“誰か”ではありません。チームとして子どもの育ちを見極め、何を目ざし、どう育てていくのかを共有して取り組める「体制づくり」と、個々の「課題意識」が学校力の源です。

九州大学大学院の八尾坂　修教授は学校力向上には、教職員の「協力し合える同僚性」「工夫改善を進める革新性」「建設的に意見交換し合える自律性」が必要とし以下の評価指標を示しています。

◆「学校力」向上のための評価指標

（八尾坂 修著「学校改革の課題と挑戦」ぎょうせい）

同僚性の評価指標…①指導内容・指導方法・評価等について積極的に話し合えている。②他の係の仕事にも積極的に協力し合えている。③子どもに問題が起きたとき、組織的に取り組めている。④保護者との関係が良好であり互いが協力的である。

革新性の評価指標…①子どもや環境の変化に柔軟に対応している。②従来の指導方法のみに固執することなく、学習形態や指導法、教材の精選の工夫を図っている。③「学校改善」「授業改善」ということが頻繁に話題にのぼる。

自律性の評価指標…①進んで意見を出し合いその拠り所を称賛し合える。②つまずき易い子どもへの学習指導を全面課題として取組みを進めている。③積極的に授業を見せ合い建設的に意見交換し合えている。

これらの評価指標を『Ｐ(計画)Ｄ(実施)Ｃ(評価)Ａ(改善)』サイクルと結び付けることで、学校力向上＝教職員の自己成長が図られると思われます。

また、学校力の向上を目ざす“学校まるごとパック事業”では、これまでの成果を継承しつつ更なる発展へと大きな期待が寄せられています。

取組みの重点 ② 学力の向上

- **○主体的・協働的な学びの充実**
- **○家庭学習の習慣化**

子どもたちは「友だちと関わり合う中で、自分を表現でき、互いが認め合い高まり合えている」と実感できる授業を求めています。そして、このような「主体的・協働的な学び」を実現していくことは、子どもに学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。

昨年度「主体的で協働的な学び」を追求するシリーズ“授業力向上研修”をはじめ、アクティブ・ラーニング実践研究校として大阪府教育委員会の指定を受けた南第一小学校の実践研究の成果が市内全小中学校に発信され、大きな流れになりつつあります。

大阪狭山市ではこれまでの成果をもとに、更に「主体的で協働的な学び」の実現に向け研究を推進し、一層の学力向上を目ざします。《裏面へ》

“学校づくり応援事業”で本市に継続的に指導をいただいている先生から次の提言をうけました。その一部を紹介します。

学校づくり応援事業（於）狭山中学校(2/18)
『授業づくりへの提案』
関西大学　若槻 健 准教授

■互いに関連する次の３点を意識した授業づくりを進めていく必要があります。
◎アクティブ･ラーニング（自主的で協働的な学習）
◎実際生活･社会とつながった学習
◎ユニバーサル･デザインを基盤にした授業

■誰にこだわって授業を進めるのかです。受動的な学習で一番損をしているのは勉強の苦手な子です。授業がアクティブでなくても、教師主導型の一斉･受動的な学習であっても、受験との関係でのみ学習が語られ何の為に学習しているのか分からなくても、勉強する子は勉強します。一方で、学習から逃げ出す子どもも出てきます。今、強く求められる「自ら学び続ける力・課題を解決する力・仲間で高め合う力」は、従来の授業では育ちにくいとの指摘を真摯に受け止める必要があります。

■興味を引く話や上手な解説で効率よく知識を理解させる授業は「子ども達の長い人生にプラスをもたらすのか？」この“問い”は重要です。時代の大きな変化によって、社会で必要とされる資質･能力･学ぶ内容も変わります。2020 年からの新センター試験では、知識の多さと正確さを評価する現行の暗記型試験から記述式で思考力を問うものに変わります。また就職期には「社会力やコミュニケーション力や協働する力や自分自身で考える力」が求められます。これらの力を授業を通して積み重ねていない子にとって大変辛いものになります。

■　大阪大学による大阪学力調査(2013)

		平均点
学級の学び合い･教え合いの豊かさについて	「豊か」と答えた生徒が多いクラス	64.46
	「普通」と答えた生徒が多いクラス	60.34
	「豊かでない」と答えた生徒が多いクラス	58.58
学級の人間関係性の良さについて	「良い」と答えた生徒が多いクラス	64.02
	「普通」と答えた生徒が多いクラス	60.82
	「良くない」と答えた生徒が多いクラス	58.55

（近日発刊　志水宏吉･若槻 健 編著「つながりを生かした学校づくり」東洋館出版社より）

アクティブ･ラーニングや班での学び合いなどと「学力との関係」を調査した結果「学び合い･教え合い」が“豊かだ”と答えた生徒が多いクラスと、生徒同士や先生との人間関係が“良い”と答えた生徒の多いクラスは学力が高いという結果が示されました。同時に、人間関係の“良さ”と自尊感情・キャリア形成力の高さとの強い関連性も示されました。“学び合い･教え合い”を通して生徒同士が互いに尊重し合える“良い”関係を築ける授業づくりが大事です。

取組みの重点　③　心の力の向上

○どの子も安心して学べる集団づくり
○道徳教育の推進（「特別の教科」小 30年度、中 31年度）

どの子も「仲間と温かくつながりたい」と願っています。集団での遊びや、相手の立場に立って考える経験が浅い今の時代、良質な集団づくりを目ざして教師が意図的･計画的に取り組む必要があります。授業や活動で、子ども同士がつながる場・相手の立場に立って考えさせる場・互いが認め合える場・自尊感情の高まる場･･･をどう築けばいいのでしょう。

「～さんはなぜそう考えたのかな」
「～さんの考えの素晴らしい点を考えてみよう」
「～さんの気持ちが分かりますか」
「～さんはなぜそんな気持ちになったの」

一人の意見一人の気持ちを全員で受け止め合う教室では、本音が語られ正当な考えが広まっていきます。その基盤になるのが、肯定的な言葉･共感的な表現などで、一人ひとりの子どもの良さを全員に知らせ共有していこうとする教師の姿勢だと考えます。

取組みの重点　④　体力の向上

○運動能力の伸びを実感できる取組みの工夫
○命を守る行動力の育成

『H27 全国体力･運動能力,運動習慣等調査報告書（各校に配付済み）』によると、体力･運動能力の高い児童生徒が多い学校（体力上位校）には次の特徴があります。これらも参考にしながら、今後とも積極的な取組みを進めてまいりましょう。

運動･スポーツの楽しさや喜びを実感できるような授業や取組みの中で、児童生徒の**「運動への意識の向上」⇔「運動時間の増加」⇔「体力･運動能力の向上」**の相乗効果を理解し働き掛けている。

○楽しさと喜びを味わえる工夫がある授業の展開
○活動の“ねらい”や“意図”を児童生徒に明示
○教育活動全体で計画的な取組みの推進
○児童生徒が「運動の大切さ」を理解できる指導
○家庭への啓発を通して「家族」との運動や話題の活性化
○「話し合う･助け合う･役割を果たす」など、友だちとの関わりを重視した活動